

児童生徒の学ぶ意欲を高める学習環境づくり

第1章 総論

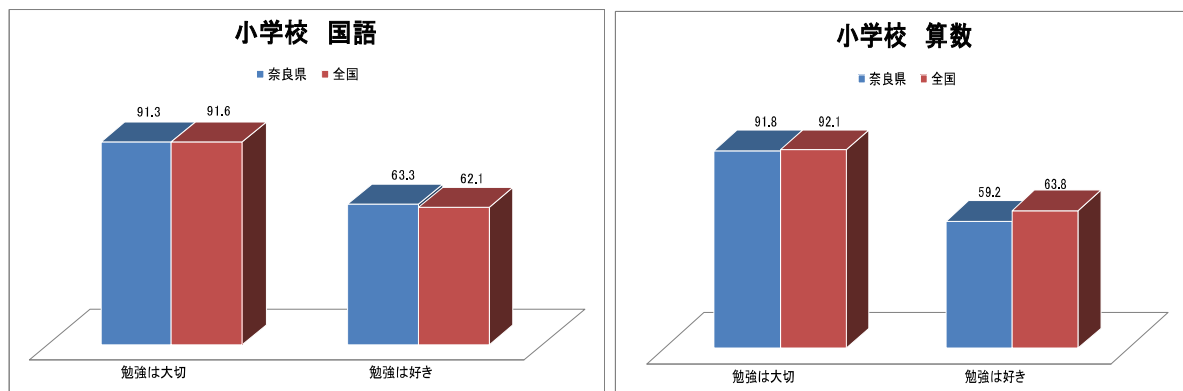
第1節 研究主題設定の背景

学習指導要領の改訂において、「生きる力」を育むという理念が継承され、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成が重視されている。また、学校教育法の一部改正をもとに確かな学力の構成要素として、基礎的・基本的な知識・技能の習得すること、思考力・判断力・表現力等の育成とのバランスを重視すること、学習に取り組む意欲を養うことも改訂の基本方針の中に示された。学習意欲は、基礎的・基本的な知識・技能やそれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を高める上での基盤となるものである。

奈良県の児童生徒は、これまでの全国学力・学習状況調査の結果から、「全国的にみて国語や算数・数学の成績は比較的よいが、国語や算数・数学が好きな子どもは全国と比べ少ない。」ということが明らかになっている。小学校国語Bの平均正答率は、奈良県78.9%、全国77.8%、中学校国語Bの平均正答率は、奈良県65.0%、全国65.3%、小学校算数Bの平均正答率は、奈良県50.1%、全国49.3%、中学校数学Bの平均正答率は、奈良県45.4%、全国43.3%である。成績は全国的にみて、比較的よい結果であるが、小学校国語を除く、小学校算数、中学校国語、中学校数学では、それぞれの教科を「好きである」と回答している児童生徒の割合は全国平均より低かった。このことから、学習に対する意欲の低さが県の教育課題の一つとして挙げられ、学習意欲を高める取組を進めているところである。

さらに、同調査結果から、図1のように「国語の勉強は大切」、「算数・数学の勉強は大切」と回答した児童生徒の割合に比べて、「勉強が好きだ」と思っている児童生徒の割合が低いことが明らかになっている。

学習指導要領の生きる力の確かな学力とは、基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する能力である。確かな学力を児童生徒に付けさせるためには、児童生徒を主体的に学習に取り組ませることが必要であり、児童生徒の学習意欲を高めることが大前提となる。そのためには、教員が、子どもたちに学習することへの興味・関心をもたせ、学習することが楽しいと感じられる場、もっと学習したいと思える場、やってよかったと実感できる場をいかに設定するかが重要であ



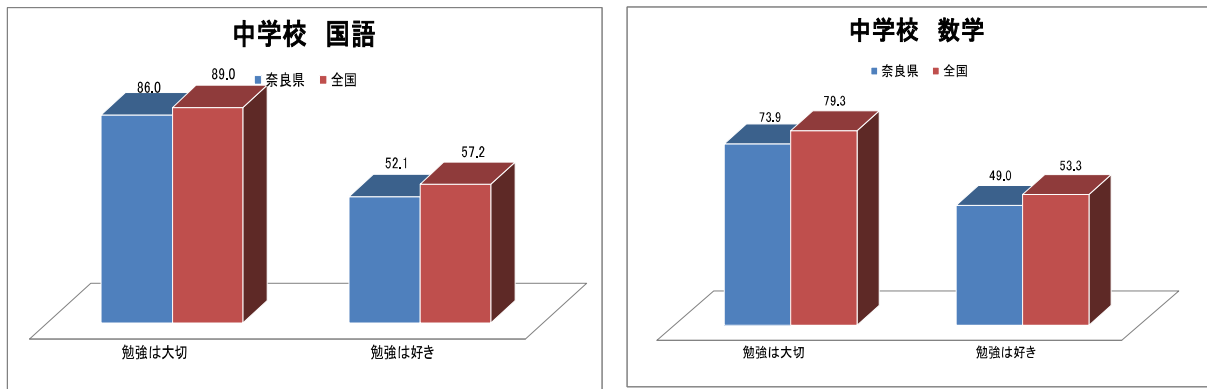


図1 国語、算数・数学に対する意識

(平成22年度全国学力・学習状況調査 奈良県)

り、そのような場を提供することができれば、子どもたちは学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組むのではないかと考える。

第2節 学習意欲と動機付け

学習意欲といえ、興味・関心のような「内発的動機付け」が重要であるということも言うまでもない。市川(2004)は、『外発的動機付け』による方法の背景には、子どもというものは基本的には勉強が好きではないという考えがあり、でもなんとか勉強させたい。ではどうするかという、テストの点が良ければ親がおこづかいを増やしてあげたり、学校の教師がシールを貼ってあげるとか外からの賞罰で動機付けようとする。この考え方は20世紀前半ごろは強かったが、20世紀後半になると内発的動機付けに転換してきた。」と述べている。また、櫻井(2008)は、「興味・関心(好奇心)に基づく学ぶ意欲(いわゆる内発的動機付け)だけでなく、有能さへの欲求や向社会的欲求に基づく学ぶ意欲を含めた『自ら学ぶ意欲』を概念化することによって、学ぶ意欲を高める方法はより豊かになったものと思われる。」と述べている。さらに、速水(2008)は、「一時的に子どもの気持ちを盛り上げるだけでなく、「わかる」「できる」という自信と結びつかなくては本当の意味で学習意欲になっているとはいえない。」としている。

そこで、学習意欲を育むためには、まず「おもしろい」、「やってみよう」、「もっと知りたい」、「できるようになりたい」などの内発的動機付けや有能さへの欲求を児童生徒にもたせることが必要であると考え、それらを学習行動につなげるようにできれば、児童生徒が学習において、有能感や充実感を感じるようになるのではないかと考えた。

本プロジェクトでは、内発的動機付けや児童生徒の欲求を育むためには、教育的な意図に基づいたはたらきかけが必要であると考え、そのはたらきかけの中でも学習環境に焦点を絞り、テーマを設定した。

第3節 学習意欲と学習環境づくり

鹿毛(2010)は、「学習環境は、『学習者を取り囲む外界』(われわれの生活で会うすべての場)である。」と考えている。児童生徒を取り巻く学習環境には、大きく分けて人的環境と物的環境がある。これらの環境を整備し、安心して学べる環境にすることが、児童生徒の学習意欲を高める上で重要な要素となる。児童生徒の学習意欲を高める上で教員は特に重要な人的環境であろう。栃木県総合教育センター(2010)は、『先生は自分に期待をかけてくれている。』、

『先生は自分の良いところを見てくれている。』と思えることが児童生徒の学習意欲の土台となる安心感につながる。」と考えている。次に、物的環境であるが、そこは教室の内も外も全てが児童生徒の学ぶ場であるという視点をもつことが不可欠である。例えば、現在学習している内容の本が教室内の図書コーナーにあたり、その資料が教室内の壁や廊下などに掲示されていたりすると、学習の内容に更に興味を持つであろうし、児童生徒の学習の成果が掲示されていると、児童生徒は「みんなに見てもらえるんだったら、もっといいものを作ってみよう。」「あの人の作品はすごくいいから自分もがんばってみよう。」というような気持ちになり、意欲を高めるきっかけとなるのではないか。また、理科室などの特別教室に、掲示される内容や掲示物の大きさ、掲示する場所や期間等、教員の教育的意図に基づいた掲示物が工夫されていれば、児童生徒の興味・関心を高め、内発的動機付けにつながると考える。教員は、全ての児童生徒の学ぶ意欲をいかに育み、いかに主体的な学びを促すかという教育的な目標のもと、学習環境を構想、構築し、教育実践を展開していかなければならないと考える。鹿毛(2010)は、「学習者側の要因として吟味すべきポイントを考慮に入れ、臨機応変にダイナミックな学習環境を構想し、実践を展開することが望ましい。」として、学習環境を構想し実践を展開するとき考慮すべき七つの視点、「学びの重視」、「個性の重視」、「意欲の重視」「思考の重視」、「協働の重視」、「表現の重視」、「体験の重視」を示している。

本プロジェクトでは、鹿毛の七つの視点を参考にして、児童生徒の学習意欲を向上させるために、物的環境に関わる四つの視点「体験の重視」、「表現の重視」、「思考の重視」、「興味・関心の重視」から学習環境を構想、構築し、研究を行うことにした。

以下にその四つの視点についてまとめる。

- ・体験の重視：児童生徒が五感をフルに活用するような場や活動をバランスよく組み込むように配慮する視点。
- ・表現の重視：児童生徒が学習した内容を改めて自分自身の言葉で説明し直したり、他者に向けて分かりやすく解説したりするような表現活動の場を組み込むように配慮する視点。
- ・思考の重視：児童生徒が自らで問題を発見し、解決していくといった思考のプロセスをサポートする場を設定するように配慮する視点。
- ・興味・関心の重視：児童生徒の興味・関心が喚起され、意欲的な学習につながるような場を設定するように配慮する視点。

以上の四つの視点が児童生徒の学ぶ意欲の向上へといかにつながるかを図2で示した。本研究では、国語、理科は思考の重視、算数は表現の重視、外国語活動は興味・関心・体験の重視、社会、体育は興味・関心の重視の視点から学習環境を構想、構築し、児童生徒の学ぶ意欲が高

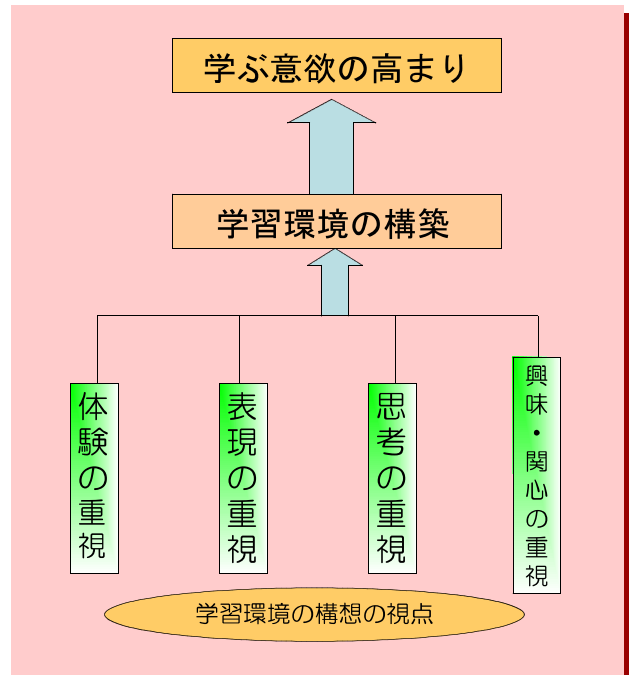


図2 (鹿毛, 2010を一部改変)

まることを検証した。また、具体的な学習環境として、掲示物を取り上げ、研究を行った。教員の明確な教育的意図に基づいた掲示物は、児童生徒のやる気を起こさせ、児童生徒が自ら学ぼうとする意欲を育む有効なツールであると考えている。

授業は、教育的意図を持った学習環境が根底にあり、その上に指導法があって初めてより良い授業になるものと考えている。中谷(2010)は、「教師の役割は『すべての学習者に学びを保障するような環境をデザインすること』と『学習者とのかかわりを通して学習を促すこと』である。」と述べている。

本プロジェクトでは、学習環境の一つである掲示物に焦点を当て、教育的意図に基づいて、その掲示物の掲示期間、大きさ、内容等を工夫し提示することにより、学ぶ意欲の構成要素としての欲求・動機が児童生徒の中に生まれるのではないかと考えた。また、欲求・動機が具体的な行動として表出すれば、その結果として有能感や充実感を感じさせることができ、それらが新たな欲求・動機につながって、学ぶ意欲がさらに高まっていく。そのためにも、まず欲求・動機を児童生徒にもたせることが重要であると考えている。

参考・引用文献

- (1) 文部科学省初等中等教育局学力調査室 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査課 平成22年度全国学力・学習状況調査
- (2) 鹿毛雅治 (2010)「第2章 学習環境と授業」(高垣マユミ 編著)『授業デザインの最前線Ⅱ』北大路書房 pp. 21-38
- (3) 鹿毛雅治 (2007)『子どもの姿に学ぶ教師』教育出版
- (4) 市川伸一 (2004)『学ぶ意欲とスキルを育てる』小学館
- (5) 櫻井茂男 (2008)「動機づけ論を再考するー「内発的動機づけ」から「自ら学ぶ意欲」へ」『児童心理』金子書房 pp. 17-22
- (6) 速水敏彦 (2008)「学習意欲を高めるー子どもが学習に魅力や価値を感じる時」『児童心理』金子書房 pp. 2-10
- (7) 中谷素之 (2010)『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり』
- (8) 栃木県総合教育センター (2010)『学習意欲をはぐくむ』
- (9) 奈良県立教育研究所 (2010)『研究紀要・研究集録 第18号』